

9月6日 年間第23主日

イザ 35:4〜7 ヤコ 2:1〜5 マコ 7:31〜37

1. マコ

v.32 「人々は耳が聞こえず舌の回らない人を連れて来て、その上に手を置いてくださるようにと願った。」

この福音書の著者はこのいやしの出来事を物語るに際して、恐らくイザ 35:6 を想起して v.37 を付加したものとされます。しかし、むしろ私たちはこのいやしの奇跡におけるイエスの描写に、注意を向けたいと思います。同じマルコ福音書の 1:40-45 に語られているいやしの奇跡の場合と比べると、これはイエスにとって一筋縄ではいかないものであった様子が、生き活きと描かれています。イエスは天を仰いで“深く息をつき”、その人に向かって、すなわち彼に取りついている悪霊に対して、“エッフアタ”と言われました。

“深く息をつき”という言葉は、使徒パウロがロマ 8:26 で、聖霊自らが私たちを、「言葉に表せない“うめき”をもって執り成してくださる」と述べているのと同じものです(ロマ 8:22,23)。悪魔に戦いを挑む神の子の激しい息吹が、忠実に描かれています。

今朝のテキストは、五千人の給食(6:30 以下)から始まった物語りの結尾であり、それは四千人の給食(8:1 以下)から始まって盲人のいやし(8:22 以下)に至るもう一つの物語りと対を成してします。そしてその後、ペトロの信仰告白の物語りが続いています。恐らくマルコ福音書の著者は、彼の時代の教会にとっての、イエス・キリストへの信仰とその正しい告白はすべて、奇跡以外の何物でもないという実感をここで語ったのでしょう。

使徒たちでさえ、最初は盲目であり、耳が聞こえなかったけれども(8:18)、今は「耳が開き、舌のもつれが解け、はっきり話すことが出来るようになった」(v.35)のであり、信徒もその同じ恵みの中に置かれていればこそ、「耳のある者は聞きなさい」(4:9)という言葉に感謝をもって受けることが出来たのです。

現代のキリスト者である私たちにとっても、神のことばを聞く耳が開き、イエス・キリストへの信仰をはっきりと宣言出来ることは、ただ神の恵みによる奇跡なのであり、私たちはその恵みを神に願い求めなければなりません。「その上に手を置いてくださるようにと願った。そこで ……」(vv.32-33)。

2. ヤコ

私の出席しているカトリック浜松教会では、主日のミサに参加する殆どの男性信者が、とても rough な服装で御聖堂に入って来ます。ですから、服装で貧富や社会的地位の差を区別することは出来ません。ビジネスの世界でなら、それぞれにふさわしい服装が、仕事への熱意や姿勢を表現するものです。ですから、彼らは週日の仕事するときにもそんな rough な服装で働いている訳ではないでしょう。ちょっと不思議な光景

です。

しかし、それで「隣人を自分のように愛しなさい」(2:8)という律法を、彼らが実行していることにはならないのです。教会で信者が愛によって行動するとは、“(信仰の)人を造り上げ”、“(信仰の)教会を造り上げる”ために働くことであって、ただ rough な服装でミサに参加することで「他の人が造り上げられるわけはありません」(1コリ14:17)。

v.5 「神は世の貧しい人たちをあえて選んで、信仰に富ませ、御自分を愛する者に約束された国を、受け継ぐ者となさったではありませんか。」

そのような“信仰の富”のゆえに隣人を尊敬し、互いに感謝するためには、先ず自分自身が豊かに“信仰の富”を受けて、謙遜にならなければなりません。「それは、初めから終わりまで信仰を通して実現されるのです。」(ロマ1:17)

3. イザ

預言者イザヤにとって、シオン(35:10)は終末的な希望の中心でありました。彼は神に対する人の側の信仰を強調し、イスラエルの民が政治的にも社会的にも神以外のものに頼ることを責めました(2:6,8, 28:18, 29:13-14, 31:1-3)。

このイザヤ書に、やがて第二イザヤの影響を受けた加筆が加えられました。それがこの35章です。今朝のテキストが、終末時の開始のしるしとして、イエスによって引用されています(マタ11:2以下)。

現代のカトリック教会の信者は、“口先で神を敬っている”だけなのか(マコ7:6)、それともキリストの福音に“耳が開き、舌のもつれが解け”(マコ7:35)て、「イエス・キリストは主である」(フィリ2:11)と公に宣べているのか、ということを確認しなければなりません。 Show the flag! (旗印を明らかにせよ)

v.4 「見よ、あなたたちの神を。…… 神は来て、あなたたちを救われる。」

ハレルヤ、アーメン。

9月13日 年間第24主日

イザ 50:5～9 ヤコ 2:14～18 マコ 8:27～35

1. マコ

v.29 「そこでイエスがお尋ねになった。“それでは、あなたがたはわたしを何者だというのか。” ペトロが答えた。“あなたは、メシアです。”」

イエスが復活昇天された後に、使徒たちが宣教したイエス、そして原始教会の人々が自分の罪を悔い改めて信仰したイエスは、“十字架の苦しみを受けられたイエス”(v.31)でありました。御自分の民であるユダヤ人に裏切られ、排斥されて、ポンティオ・ピラトのもとで十字架につけられ、三日の後に復活されたキリストこそが、彼らのメシア像であったと言うことが出来ます。

しかし、このようなメシア理解は、真に福音的な悔い改めを経ないでは不可能であることを、今朝のテキストは私たちに教えてくれます。ペトロがイエスに“サタン、引き下がれ”(v.33)と叱責されたという伝承は、使徒本人に起源するものでなければ、原始教会では“あり得ない話”でありました。ですから、福音を信じるに至る“悔い改め”(1:15)とは如何なるものなのかを、私たちはこのテキストから学ばなければなりません。

多くの人々は、この世界の不幸や悲惨や悪や争いについて、なにがしかの知識を持っていて、宗教の目的は神の助けと人間の努力によって“みんなが平和な世界”を築くことであるように、考えたりします。しかし、人となられたまことの神である御子イエスがそのために苦しみを受けられた“わたしたちの罪”に、福音が私たちに直面させ、私たちが悔い改めさせるときにだけ、使徒たちが伝えたメシア理解を私たちも共有することが出来るのです。

ニケア・コンスタンチノーブル信条は次のように告白しています。“主は、わたしたち人類のため、わたしたちの救いのために天からくだり、…… 苦しみを受け、……”。御子イエスの十字架の苦しみは、私たち人間が“人となられたメシア”を拒否し、排斥した罪のためでありました。そこで行われた神に対する人間の反逆の中にまさに自分がいるということを、“サタン、引き下がれ”というイエスの叱責の言葉が気づかせてくれるのです。

そして、そのような悔い改めと信仰は、ただ神の恵みによる奇跡なのですから、私たちは聖書を学ぶ中で、その恵みを神に願い求めなければなりません。

2. ヤコ

v.17 「行いが伴わないなら、信仰はそれだけでは死んだものです。」

悔い改めと信仰が神の恵みによる奇跡、すなわち聖霊の御業であるとき、それは直ちに隣人と福音を共有するという“愛の行為”を生み出します(1テサ 1:4-8、ロマ 1:12-15 参照)。

近代のキリスト教の歴史において、私たちは“信仰”がしばしば“ヒューマニズム”や“市民的正義”と

取り違えられるのを見て来ました。それらは“行い”は伴うけれども、十字架に苦しみを受けられた御子の福音への“悔い改めと信仰”が欠落しています。キリスト教的行為の規範が別のものになり、福音と信仰は信者からは縁遠い学問の世界の事柄と考えられています。

“私たちには行いがある”と言う人たちに、それでは“あなたの行いに伴う信仰”を見せなさいという、いわば逆説的な語りかけを聞くことも、また大切なのです。ヤコブの手紙は、それだけで独立した文書としてではなしに、聖書全体の中で理解されなければなりません。

3. イザ

v.9 「見よ、主なる神が助けてくださる。誰がわたしを罪に定め得よう。」

もし誰かが、“十字架の道行き”の黙想を、“可哀想なイエス様への同情と嘆き”のように理解するならば、それは全く見当外れなことです。イエスが受けられた十字架の苦しみは、世界を悲惨と不幸から救う偉大なるメシアの行為であって、私たちキリスト者はただそれを眺めているだけの他人事のように、考えるはなりません。

私たち人間の罪と反逆のために、“人となられたまことの神”が苦しみを受けておられるのです。十字架にかかって自らその身に担ってくださった私たちの罪(1ペト 2:24)を理解するには、信仰が必要なのです。“打とうとする者”“ひげを抜こうとする者”“あざける者”(v.6)とは、外ならぬ私自身であったと知るとき、初めてそれが、私たちが罪に対して死んで、義によって生きるようになるためであったこと(1ペト 2:24)を信じる事が出来ます。

ハイデルベルク信仰問答の第37問は、次のようになっています。

問 “苦しみを受け”という小さな言葉で、あなたは何を理解しますか。

答 彼がその地上の生活のすべての時に、ことにその終わりにおいて、全人類の罪に対する神の怒りを、身と魂に担い給うたということを、理解します。

ハレルヤ、アーメン。

9月20日 年間第25主日

知 2:12,17~20 ヤコ 3:16~4:3 マコ 9:30~37

1. マコ

v.31 「人の子は、人々の手に引き渡され、殺される。殺されて三日の後に復活する。」

今朝の福音書の朗読配分が、vv.30-37となっていることに、先ず注目しましょう。イエスによる御自分の死と復活の予告は、マルコ福音書ではこの箇所の外に 8:31 と 10:33-34 にも記録されています。それらが同じイエスの言葉の三つの変形であるか否かという疑問よりも、ここではそれが vv.33-37 の前段として記録されていることの意味を問うことの方が重要です。

かつて外国伝道の対象とされた日本の教会で、幼児教育が推進される時の理由付けとして、vv.36-37 が用いられました。“イエス様は子供が大好きでした。だから教会は子供を大切にすることです” という説明は、分かりやすいけれども、ただのこじつけにしか過ぎません。

初代教会が大切にしていたイエスの語録の断片の多くは、新しい状況の変化に応じてあるいは再解釈され、あるいは再編集されました。当然そこにはいろいろな解釈が混在していました。先ず今朝のテキストによれば、イエスは真に偉大なのはへりくだってすべての人に仕える謙遜であると教えて、その一例として、このような“小さな者”を受け入れることはわたしを受け入れることになると言われました。しかし マタ 18:1-5 および マコ 10:13-16 によれば、“自分を低くして、この子供のようになる人が、天の国でいちばん偉い”と解釈されています。さらにその動機付けが、キリストの名のために(v.37)と語られていることから、私たちは vv.30-32 との結びつきを考える課題を与えられていることとなります。

すでに“マリアの賛歌”で、旧約以来の謙遜が歌われていますが(ルカ 1:51-53)、イエスの教えの中にも謙遜の必要を説いたものが数多くあり(マタ 23:12 他)、御自身についても謙遜を語り示されました(マタ 11:29、ヨハ 13:4-17)。使徒パウロも信徒の交わりの原理として謙遜を教えました(フィリ 2:1-5)、彼は明確にその根拠をキリストの受肉と十字架に置いて説明しています(フィリ 2:6-11)。

2. ヤコ

v.18 「義の実は、平和を実現する人たちによって、平和のうちに蒔かれるのです。」

フランシスコ会訳の新約聖書では、冒頭の部分が「神の御心になつた生活という実を結ぶ種は」と意訳されています。また“平和”という言葉が、新約聖書でどのような意味で使われているかを理解することが大切です。「このように、わたしたちは信仰によって義とされたのだから、わたしたちの主イエス・キリストによって神との間に平和を得ており、このキリストのお陰で、今の恵みに信仰によって導き入れられ、神の栄光にあずかる希望を誇りとしています。」(ロマ 5:1-2) それは“神との間の平和”、すなわち“神との間の和解”(II コリ 5:18)であって、キリストの受肉と十字架によって実現しました。

このような聖書の言葉が、いわゆる平和運動のための理由付けとして利用されているのは周知の事実ですが、それは決して正しい聖書の読み方ではありません。キリスト者にとって“聖書を学ぶ”とは、そのことによって「キリストの体(である教会)を造り上げていく」(エフェ4:12)という実を結ぶのでなければ、焦点がずれていることとなります。

ヤコブの手紙を聖書正典の一書として読み、理解することの大切さを、強調しなければなりません。

3. 知

v.18 「本当に彼が神の子なら、助けてもらえるはずだ。敵の手から救い出されるはずだ。」

マタイ福音書の受難の描写において、詩 22:8-9と共に、明らかに 知 2:17-20 が考慮されました。キリストがそのために死に渡された“わたしたちの罪”(ロマ4:25)がどのようなものであったかを、マタイは 知 2:1-11 において見たのです。

かつては単に「神を信じない者はこのように考える。だが、それは間違っている」(2:21)と言われるだけであったのに、今や教会は「わたしたちの主イエス・キリストによって神との間に平和を得ており」(ロマ5:1)という、「新しいものが生じた」(II コリ5:17)時代に歩んでいます。

いつの時代にも、その時代が共有する正義感や価値観、あるいは社会的賛同というものが存在します。そして、それらは決して無意味なものではありません。しかし、私たちキリストの救いに依り頼む者にとっては、「大切なのは、新しく創造されることです」(ガラ6:15)、「人は律法の実行ではなく、ただイエス・キリストへの信仰によって義とされる」(ガラ2:16)ということこそが大切なのです。「このような原理に従って生きていく人の上に、つまり、神のイスラエルの上に平和と憐れみがあるように。」(ガラ6:16)

ハレルヤ、アーメン。

9月27日 年間第26主日

民 11:25～29 ヤコ 5:1～6 マコ 9:38～48

1. マコ

v.40 「わたしたちに逆らわない者は、わたしたちの味方なのである。」

聖書に親しんでいる人なら、ここでもう一つのイエスの言葉を思い起こすに違いありません。それは「わたしに味方しない者はわたしに敵対し、わたしと一緒に集めない者は散らしている」(マタ 12:30 = ルカ 11:23)というものです。

恐らくこの v.40 は、使徒ペトロを通して伝えられた真正なイエス自身の言葉であろうと推測されるのですが、そのイエスの生の言葉が、今なお聖書を通して現代の教会に対しても語りかけているのです。

教会憲章はキリストの唯一の教会について説明して、“この教会は、この世に設立され組織された社会としては、…… カトリック教会のうちに存在する”と述べた後、直ちに続いて、“しかし、この組織の外にも聖化と真理の要素が数多く見出されるが、それらは本来キリストの教会に属する賜物であり、……”(8)と語っています。ローマ・カトリック教会は公式には、この“組織の外”には教会は存在しないと主張し、プロテスタントの諸教会と決定的に対立しています。

それではプロテスタントの諸教会は、「わたし(キリスト)と一緒に集めない者は散らしている」ということになるのでしょうか。エキュメニズムに関する教令は、“我々は、これらの分かたれた諸教会と諸教団には欠如があると信じるが、決して救いの秘義における意義と重要性を欠くものではない。なぜならキリストの霊はこれらの教会と教団を救いの手段として使うことを拒否しないからであり、……”(3)と、明確に述べています。

v.41 「はっきり言っておく。キリストの弟子だという理由で、あなたがたに一杯の水を飲ませてくれる者は、必ずその報いを受ける。」

“キリストによって、キリストと共に、キリストのうちに、聖霊の交わりの中で”(感謝の典礼/栄唱)ささげられるどんなに小さな働きをも、天の父は見ておられるのです。そのような“ローマ・カトリック教会の組織の外”での信仰に基づく諸活動を、カトリック教会の子らは心にとめなければなりません。

2. ヤコ

ローマ・カトリック教会を通して、すべてのカトリック信者は“真理と恩恵”(教会憲章 8)を受けて、豊かにされている(1コリ 1:5)ということは、ある意味で確かな事実です。「あなたがたは賜物に何一つ欠けるところがなく」(1コリ 1:7)、「揺るぐことなく信仰に踏みとどまり」(コロ 1:23)、「神がその愛する御子によって与えてくださった輝かしい恵みを、たたえる」(エフェ 1:6)者たちであるということ、カトリック教会の子らは感謝しなければなりません。

しかし、与えられた神の国の命を失わないためには、どんなに思い切った犠牲も惜しんではならないという聖書の警告(マコ9:43-48)を、真剣に考えようとしなない人たちが、いつの時代の教会にもいました。“富んでいる人”(v.1)という言葉から、現代社会における経済的格差への問題意識を抱く人たちも存在します。しかし、聖書における伝統的な用語法は、富んでいる者とは不信仰な人々のことであり、貧しい者とは敬虔な人々のことを指しています(ルカ1:50-53、マタ5:3参照)。

あなたは単に“富んでいる”と思いが上がっているだけなのか、それとも本当に“真理と恩恵を受けて豊かにされている”カトリック信者なのかという問いを、私たちは今朝このテキストから聞き取らなければなりません。そのことを抜きにしては、私たちはエキュメニズムの実践の将来に希望を持つことが出来ないので(エキュメニズムに関する教令6)。

3. 民

v.29 「モーセは彼に言った。“あなたはわたしのためを思ってねたむ心を起こしているのか。わたしは、主が霊を授けて、主の民すべてが預言者になればよいと切望しているのだ。”」

プロテスタントでもカトリックでも、一般の信者の間には不思議なほどに相手を拒否する姿勢、あるいは強い対抗意識が存在しています。その原因は決して神学的なものではなくて、むしろ神学的無知に基づく俗論や悪口が蔓延しているからであって、敢えてエキュメニズムに関する教令が“あらゆる軽率と無謀な熱心”(24)と呼んでいるものです。

たとえそれが現実のありのままの姿であるとしても、今朝私たちを、“キリストと一緒に集める者”(ルカ11:23)に育てようとして、聖書を通して語ってくださる神に、感謝しようではありませんか。

ハレルヤ、アーメン。